

梱包経費 見直しガイドブック



packaging material cost

消費税の見直し、景気の変動など、社会背景としてつねに存在する要因によって、

さまざまな経費が変動します。梱包にかかる経費も例外ではありません。

企業活動のなかでつねに使う梱包資材の経費変動は、直接利益幅にも影響をあたえる要素であり、

経費削減への取り組みは重要な課題になるでしょう。

このガイドブックは梱包を材質、仕様、作業から見直し、梱包経費削減を図るための手引き書です。

どうぞ、ご活用ください。

目次

■ 梱包資材の共通化によるコストダウン	03	■ 梱包作業の見直しによるコストダウン	06
■ 梱包資材の材質の見直しによるコストダウン	04	■ 適正梱包診断	07
■ 梱包仕様の見直しによるコストダウン	05	■ まとめ	08

梱包資材の共通化

現状で、いくつかの梱包資材を用いて梱包を行っている場合、それらを統一することで複数の梱包資材を常備しなくてはならない状況から脱却することができます。さらに、梱包資材を統一することで梱包方法を画一化することができます。共通の梱包資材なら大量に、しかも一度に発注することが可能となります。つまり、梱包資材の統一化は、梱包方法などの作業や経費単価の見直しにつながるのです。

A 式、B 式、C 式、N 式、たとう式など幾種類ものダンボール箱を梱包する商品ごとに使い分けしていると

梱包作業、ダンボール在庫管理は複雑化

使用するダンボールの種類を統一すると、梱包作業、ダンボール在庫管理の複雑化の防止、作業量、経費の削減が可能。

梱包費も高額化

統一された梱包資材にすると、一度に、大量に発注することが可能になるため、複数種類を少数ずつ購入した場合に比べ梱包資材購入費も抑えることが可能。



梱包に用いるダンボールの種類を統一することは、梱包コストの削減になる。

梱包資材の材質の見直し

梱包資材の材質は何を基準に選ばれているのでしょうか。たとえば梱包資材の品質の高さが商品そのものの価値を表しているとの考えから材質を選ぶことは少なくありません。しかし、本来、梱包は商品を安全に確実にお客様の手元に届けるための備品です。ここに必要以上の経費をかけ、商品の価値を高く見せる必要はありません。

材質は日進月歩進化し、優れたものが開発されています。根本的に材質を見直すことで、梱包経費を削減することができます。材質の見直し、梱包としての役割を見直すことも梱包経費の削減を考える際には欠かせない視点です。

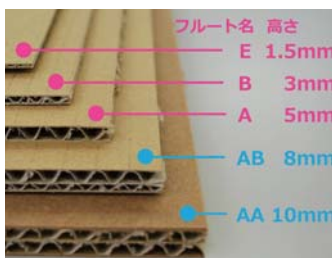
工夫の事例 01

ダンボールの厚みを考える。

商品を安全に、確実に届けるために、という思いから、必要以上に厚いダンボールを選択していませんか？

当然、厚ければ厚いほど丈夫にはなりますが、その分コストも高くなってしまいます。

輸送距離や輸送方法、商品の状態などを分析し、どの程度の丈夫さが必要なのかを見直すことが大切です。



工夫の事例 02

緩衝材、内装材を考える。

梱包資材のコストを考えたときには緩衝材や内装材に注目することも大切です。商品ごとに専用の緩衝材を用いるのではなく、どの商品にも使えるエアパックなどに統一すると緩衝材の在庫管理の簡易化や大量発注によりコストを下げることができます。

また、精密機器など、専用内装材を用いる必要がある場合には、内装材の素材、形状を工夫することで資材にかかるコストや梱包作業にかかるコストを削減することができます。



工夫の事例 03

ダンボールの色、印刷を考える。

ダンボールの色や、表面の印刷も見直しのポイントです。たとえば、白いダンボールは見た目が綺麗で箱の印象が良いものですが、汚れが目立ちやすいため、少しの汚れや傷でも破棄するしかない、という場合があります。汚れや傷が目立ちにくい茶色のダンボールに変更することで、ダンボールのロスは抑えることができます。

また、ダンボール表面の印刷にも注目しましょう。輸送の際の商品の取り扱い方法や商品名などは、印刷ではなくシールを用いるなど、過剰な印刷になっていないかの見直しも梱包経費削減につながります。



梱包仕様の見直し

梱包仕様を工夫することは、発送する側にとってメリットがあるだけでなく、商品を受け取る側にとっても、後処理の手間や経費を省けるなどのメリットにつながります。

たとえば収容数の見直し、繰り返し梱包材を使う通箱化の促進などが可能かどうか、現状の梱包仕様をチェックしてみましょう。

工夫の事例 01

収容方法の見直しで、一箱あたりの収容数アップ

今までと同様の箱を利用する場合でも、収容方法を変えることで一箱あたりの収容数を増やすことができる場合があります。

一箱あたりの収容数が増えれば、トラック一台の輸送量が増えることになるため輸送費削減につながります。

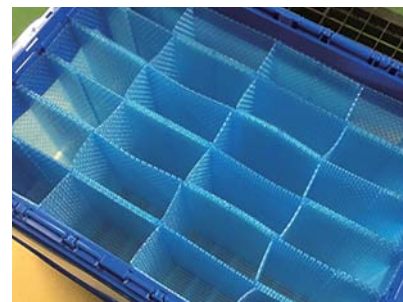


工夫の事例 02

通箱の使用でコスト削減

同じ商品を、定期的に決まった量を輸送する場合には、通箱の利用が合理的だといえます。

はじめに必要な数の通箱の用意や、発送後に通箱を回収する仕組みを作る必要がありますが、一度作ってしまえば毎回の発送ごとにかかる梱包資材のコストを大きく削減することができます。



梱包作業の見直し

商品の数だけ専用の梱包方法、梱包資材が存在する状況だと、梱包資材、作業方法の種類が増えれば増えるほど対応するスタッフは商品ごとの作業手順や梱包資材の使い方、仕様の違いを理解、習得していなくてはなりません。梱包方法や梱包資材を可能なかぎり共通化し、シンプルにすることができれば、人的、時間的、経費的出費を抑えることができます。

梱包方法の共通化

商品ごとに専用の梱包資材、梱包方法を用いるのではなく、可能なかぎり梱包資材、梱包方法を共通化することが重要です。



梱包作業の共通化

商品ごとに外箱を変えているとパレット積み作業もそれぞれの商品ごとに行わなければなりません。外箱を共通化することでパレット積み作業は同時に行うことが可能となり、作業時間を短縮できます。また、外箱をみかん箱（A式ケース）に変更するとバキュームリフトなどを用いて積み込むことができるようになり、作業者の負担軽減も実現できます。



梱包資材の大量発注化

作業の効率化だけでなく、外箱が共通であれば、商品ごとの専用梱包資材を少量ずつ発注するのに比べ、発注作業も一度に大量に行えるので手間と購入費を抑えることも可能になります。



適正梱包診断

梱包方法や梱包資材の種類、材質の選択が適正であるかを診断するには「輸送・流通過程」「省エネ・省資源」「顧客に与える影響」の3つの視点でチェックすることが大切です。

Check 01

輸送・流通過程の視点でのチェック

商品の状態、価値を低下させない梱包になっているか、そもそも無事に届くのかという視点でチェックします。

- 輸送の際に生じる外部からの影響で商品の汚損や破損が発生しないか
- 振動
- 衝撃
- 圧縮
- 水濡れ
- 温度
- 湿度
- 輸送ミスが発生しないか
- 取違いが発生しないか
- 輸送中の扱いの指示は適正か



Check 02

消費者(顧客)に与える影響の有無の視点でのチェック

商品が顧客に届いた後に、梱包資材の扱いで困らないか、顧客に納得される値段であるかなど顧客からの視点でチェックします。

- 過剰・過大な梱包になっていないか
- 梱包資材が破棄困難なものではないか
- 包装費は適正であるか



Check 03

省エネ・省資源の視点でのチェック

これからの時代、ますます重要になってくることが予想される省エネ化・省資源化の工夫は十分かという視点でチェックします。

- 過剰な梱包になっていないか
- 梱包資材を破棄した場合の環境負荷はどうか
- 再利用可能な資源は分別しやすいか



まとめ

梱包資材の経費上昇は、必要経費の上昇となり、売上利潤を圧迫する要因にもなります。

しかし、商品価格へ直接反映させていたのでは営業活動のマイナス要因にもなります。資材価格の変動に対応できる工夫を複数の視点で検討しておくことは、今後ますます重要な課題だといえるでしょう。

ところが、梱包とひとことでいっても、扱う商品の種類や種数、業種や会社の規模によっても適正な梱包のあり方は変わってきます。

いったいどこをどのように見直せば、経費をおさえながら十分な梱包が実現できるのでしょうか。

当社なら、商品への適正な梱包、商品を受け取るお客様にとっても適正な梱包のあり方、社会環境にも適正と判断される

梱包のあり方をお客様、お一人おひとりに寄り添った形でご提案できます。梱包の見直しをお考えの際は、ぜひ当社へご相談ください。

会社概要

